

担当させてもらったコレクション展内の企画「出来事——いま、ここ という経験」が「黄金伝説」展と同時開催中(5月29日まで)です！コレクション展を初めて一から担当させてもらったのですが、今回はその裏話を少しお話ししたいと思います。

コレクション展を企画するためには、その美術館の所蔵品をどれだけ熟知しているかが重要なポイントになります。しかし、愛知県美が所蔵している作品は約8000件…私の浅い経験では全部の作品を把握出来ていないため、ひとまずはじめは自分の知っている範囲で展示プランを考え始めました。しかし、それだけではもちろん不十分、と経験豊富な先輩学芸員に「こういうテーマでやりたいのだけれども…」とぼろぼろと相談し始めると、「あれは？」「これは？」と次々知らない作品を教えてもらうことができました。それによってテーマを拡充することが出来るような作品も加わり、だんだんとボリュームが増えていきます。

コレクション展示の作品選定には様々な事情が絡んできます。この作品は久しく出していないから or 新収蔵作品だし、このタイミングで出したいね…といったこともあったり、収蔵庫の作品の状態もそれぞれに異なっています。展示に際しては額装が必要な作品、状態を考慮すると今は展示出来ない作品、展示作業が大がかりになるため人員と時間を確保しなければならず今回は難しい作品などもありました。単にコンセプトに合う作品を選ぶだけではなく、このような条件を考慮しながら展示を構成し、作業のスケジュールを計算していきます。



↑ 時々出して展示方法を代々引き継ぐべき作品パク・ヒョンギ《ブルー・ダイニング・テーブル》

第2章にあたる「出来事を共有する」では、1970年に行われた第10回東京ビエンナーレ「人間と物質」展をひとつの出来事として捉えることを試みています。当館に安齋重男、大辻清司の写真があることは知っていたのですが、企画段階で両者が同じ展覧会を撮影していたことに気が付きました。ということは、二人は写真家として、この出来事を異なる形で共有していたといえるのかもしれない…と思い、その視点の違いを対比的に見せることにしました。さらに、複数の批評家が記した展評やドキュメントもひとつの展覧会を浮かび上がらせるための記録として展示しています。

実はこの「人間と物質」展、愛知県美術館の前身、愛知県文化会館美術館も当時の巡回先となっていたのです。せっかくなのでその様子もお伝えできればと考え、残されている文化会館時代の資料を漁ってみたのですが、残念ながら今回は関連したものを見つけることは出来ませんでした。しかし、展示を伝える愛知県文化会館ニュース「窓口」(発行は1961-91年。古くから当館をご愛顧していただいている方には懐かしいの?)や、毎日新聞の

紹介記事を取り上げています。これは愛知在住の作家さんから特別協力を得て実現することができました。この場を借りて改めて感謝します。



↑ 開催前夜。普段とは違う紙でキャプションを用意したり、全文に目を通してもらえるよう雑誌の他ページをコピーしたりして、ぎりぎりまでかかった展示作業もなんとか終了…。



↑ 当時の新聞記事

批評家・中原佑介による企画の先駆性から現在、再び注目されている「人間と物質」展ですが、愛知の他に京

都、福岡にも巡回しており、開催期間は短かったものの各地の鑑賞者、作家たちに大いに刺激を与えたことは間違いありません。巡回先のひとつであった愛知の資料はなかなか少ないようですが、個人的にはこれを機にまた調査していきたいと思っています。名古屋は特に縁のない土地でしたが、コレクション展をきっかけにこの土地固有の視点を持つことはとても嬉しいことでした。黄金伝説展だけでなく、この機会に是非コレクション展にも足をお運びいただければと思います！

\* 第3章「記憶のなかの出来事」で展示している野田弘志「湿原」シリーズは、1983-85年に朝日新聞に掲載されていた加藤乙彦による連載小説の挿絵として描かれたものだそう。当時、紙面上で読まれていた方はもしかして小説を思い出されるかもしれません。

(N.O)